

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語年鑑データベース活用の一例： 1991～1999年の国語研究の動向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 達哉, 新野, 直哉, 伊藤, 雅光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002934

国語年鑑データベース活用の一事例

—1991～1999年の国語研究の動向—

斎藤達哉・新野直哉・伊藤雅光

(情報資料研究部第二研究室分室)

1. 『国語年鑑』とデータベース

あらゆる学問分野において、あるテーマで研究するためには、それと同じテーマの研究がどこまで進んでいるかという、研究動向を把握しておくことが前提となる。そのような一次的な情報に行き着くまでのガイドとして、研究文献情報を検索することが不可欠な作業となる。

情報資料研究部第二研究室分室では、国語学および関連諸科学の研究動向を把握し、より効率的に文献情報を提供するために、文献・研究情報全般について、収集法およびその整理法の研究を行っている。その成果のひとつとして、『国語年鑑』を毎年刊行している。『国語年鑑』は日本語の研究や教育に関する文献の二次的な情報源として、1954年(昭和29)年5月に創刊された。創刊号冒頭には初代所長西尾実による「刊行のことば」があり、そこでは創刊の理由が「ことばに関するあらゆる意見や研究や声を記録、整理して、問題を解決し、ことばの生活を進展させる基礎材料としたいためである」と述べられている。以来、40年以上にわたって継続した刊行がなされており、学界の「縁の下の力持」としての役割を担ってきた。

現在、『国語年鑑』は、コンピュータによるデータベースをもとにして編集されている。雑誌論文の目録情報に限っていえば、1992年度よりデータベース化を開始し、『国語年鑑』への出力を1992年版(1992年12月)から開始した。その結果、2000年版までに9年間(1991～1999年)分のデータが蓄積されてきている。

本発表は、『国語年鑑』1992年版～2000年版の採録の中心となる、1991年～1999年に発表された目録情報データベース(以下、「国語年鑑データベース」と仮称する)をもとにして、国語研究の動向を知ることを試みる。

2. 雑誌論文における1991～1999年の国語研究の動向

2.1. 資料とするデータと集計方法

- (1) 「国語年鑑データベース」にもとづく。情報資料研究部第二研究室分室が保有する、1991～1999年に発表された雑誌論文の目録情報データベースで、『国語年鑑』1992年版～2000年版に相当。
- (2) 論文の分野区分は、原則として山崎(1990)に従う。ただし、現行の『国語年鑑』では「国語資料研究」は「国語史」の下位分類とし、索引・目録類だけを「参考資料」として分類している。この点だけは山崎(1990)と異なる。
- (3) なお、『国語年鑑』では連載論文をまとめて1本として扱っているが、この調査

では実際に発表された回数に分けたうえで集計した。

(例) 『国語年鑑』の記載』

連載講座；教師と子どもの話し方入門(11), (12) 一児童の話し方の練習「分かりやすく伝えよう TV 番組作り」の授業記録から、教室における教師の話し方(甲斐睦朗) 実践国語研究(全国国語教育実践研究会) 22-1, 3 1998-1, 3

『国語年鑑データベースでの扱い』

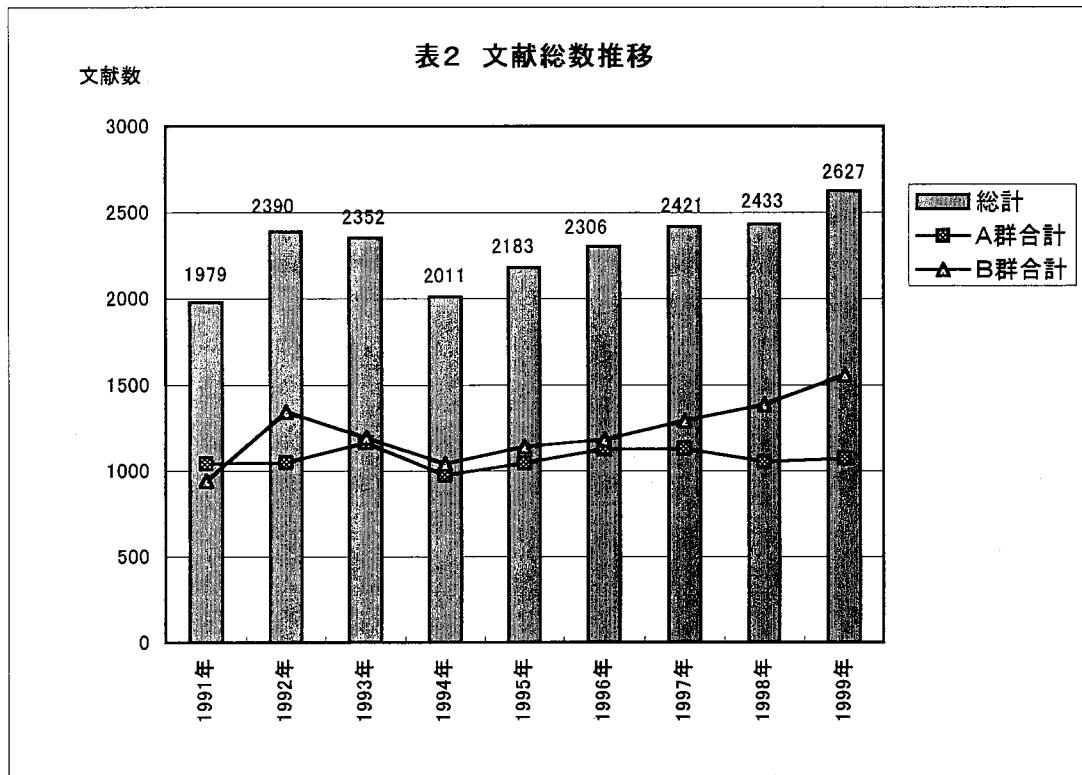
連載講座；教師と子どもの話し方入門(11) 一児童の話し方の練習「分かりやすく伝えよう TV 番組作り」の授業記録から(甲斐睦朗) 実践国語研究(全国国語教育実践研究会) 22-1 1998-1
連載講座；教師と子どもの話し方入門(12) 一教室における教師の話し方(甲斐睦朗) 実践国語研究(全国国語教育実践研究会) 22-3 1998-3

(4) 表1における「A群」とは、国語学にとって「中核的分類(A群)」([国語史] [音声・音韻] [文字・表記] [語彙] [文法] [待遇表現] [文章・文体] [方言]), 「B群」とは、「周辺的分類(B群)」([国語学一般] [古典の注釈] [日本語情報処理] [コミュニケーション] [マスコミュニケーション] [国語問題] [国語教育] [日本語教育] [言語学] [参考資料] [書評・紹介])である。これは、山崎(1990)にならった。 →【表1 年鑑統計データ】参照

表1	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	項目合計
A 国語史	113	107	162	151	109	108	117	138	104	1109
A 音声・音韻	61	90	66	51	71	74	53	55	58	579
A 文字・表記	116	79	84	94	91	64	73	64	68	733
A 語彙・用語	259	271	327	187	209	299	218	235	217	2222
A 文法	280	266	320	287	340	390	397	304	320	2904
A 待遇表現	27	18	25	25	32	24	27	14	8	200
A 文章・文体	80	56	59	67	74	59	113	114	152	774
A 方言	103	161	119	110	119	108	132	126	141	1119
A群合計	1039	1048	1162	972	1045	1126	1130	1050	1068	9640
B 国語学一般	99	103	62	104	105	91	71	54	28	717
B 古典の注釈	45	68	17	19	50	76	99	118	166	658
B 日本語情報処理	46	108	116	47	53	32	38	53	65	558
B コミュニケーション	154	200	268	218	175	218	234	213	218	1898
B マスコミ	26	73	17	38	7	15	16	18	28	238
B 国語問題	39	32	27	36	45	22	12	38	50	301
B 国語教育	108	235	170	113	186	235	267	341	377	2032
B 日本語教育	72	114	132	148	182	163	212	188	202	1413
B 言語学	294	348	302	258	291	250	236	277	285	2541
B 参考資料	9	10	10	10	6	9	9	11	19	93
B 書評・紹介	48	51	69	48	38	69	97	72	121	613
B群合計	940	1342	1190	1039	1138	1180	1291	1383	1559	11062
総計	1979	2390	2352	2011	2183	2306	2421	2433	2627	20702

2.2. 総論文数の増減について

- (1) 9年間を通してみると、年平均約2300件の論文を採録してきた。
- (2) 近年、論文数は増加傾向にある。→【表2 文献総論推移 棒グラフ】参照
 - a. 1991～1993年(平均2240件)→1994～1996年(平均2167件) 約3.3%▲
 - b. 1994～1996年(平均2167件)→1997～1999年(平均2494件) 約15.1%△
 - c. 1991～1993年(平均2240件)→1997～1999年(平均2494件) 約11.3%△
- (3) 国語年鑑の「追補」で採録されるのは、1～2年前の論文が多い。このことを考慮すると、今後、1998～1999年の論文数はさらに多くなることが見込まれる。



- (4) 分野別に見ると【文法】【言語学】【語彙・用語】【国語教育】【コミュニケーション】が上位を占める。
→次頁【表3 分野別文献比率】【表4 分野別占有実数】参照

表3 分野別文献比率
(1991~1999累積総計)

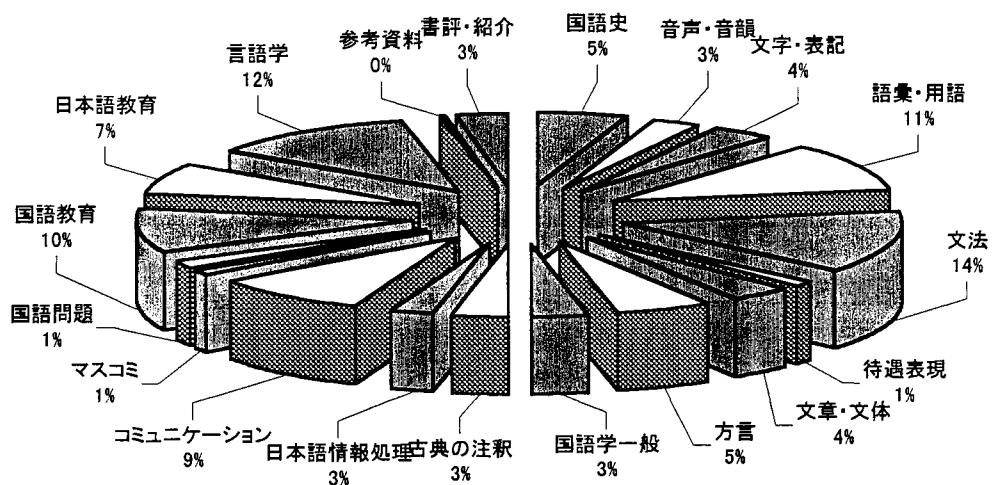
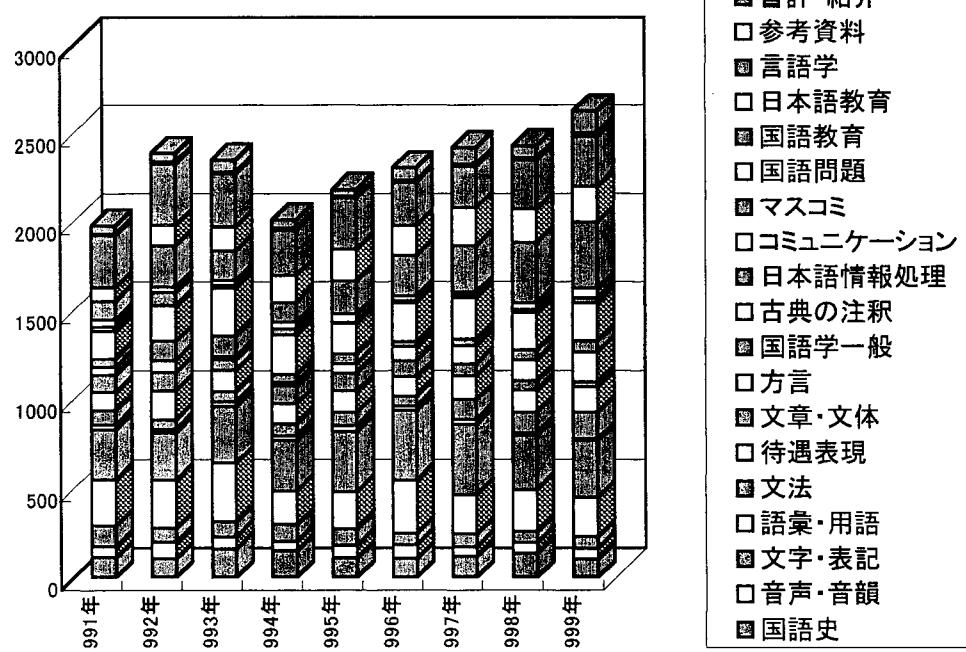


表4 分野別占有実数



2.3. 中核的分類

(1) 中核的分類(A群)は、横這い状態である。

→【表2 文献総数推移 折れ線】参照

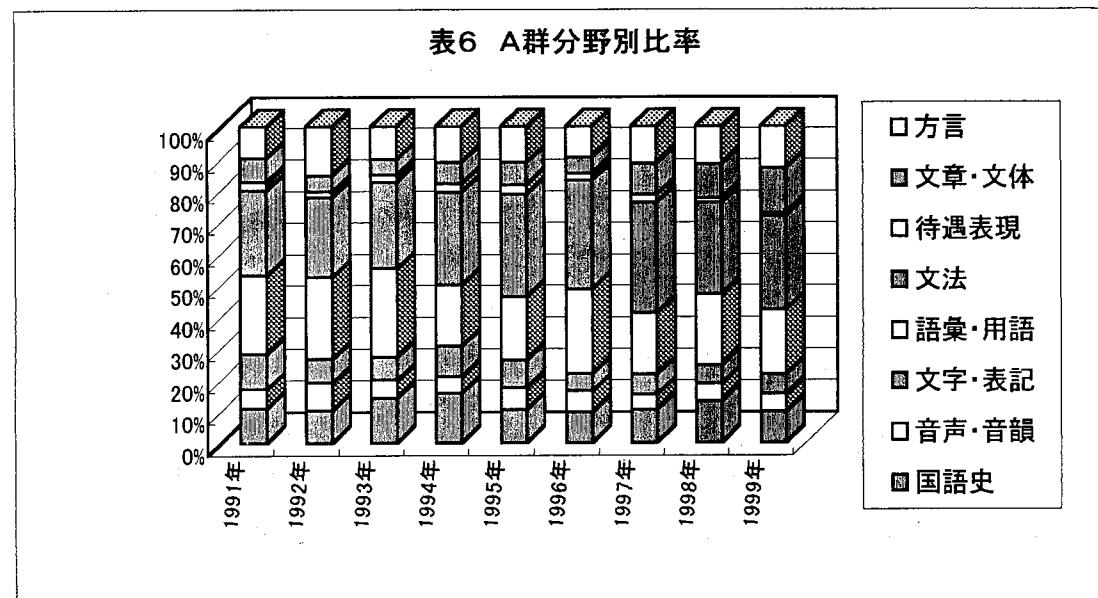
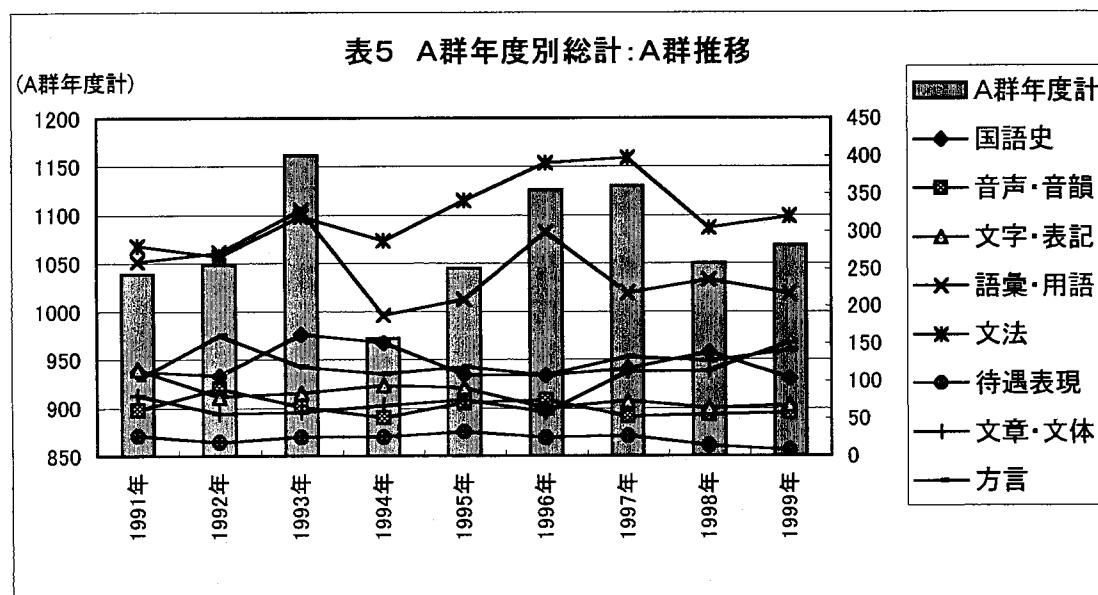
a. 1991～1993年(平均 1083 件)→1994～1996年(平均 1032 件) 約 4.7%▲

b. 1994～1996年(平均 1032 件)→1997～1999年(平均 1082 件) 約 4.8%△

c. 1991～1993年(平均 1083 件)→1997～1999年(平均 1082 件) 約 0.1%▲

(2) 中核的分類では、[文章・文体] が伸びを示してきている。

→【表5 A群年度別総計:A群推移】【表6 A群分野別比率】参照



2.4. 周辺的分類

(1) 周辺的分類(B群)は、やや大きな上昇を示す。

→【表2 文献総数推移 折れ線】参照

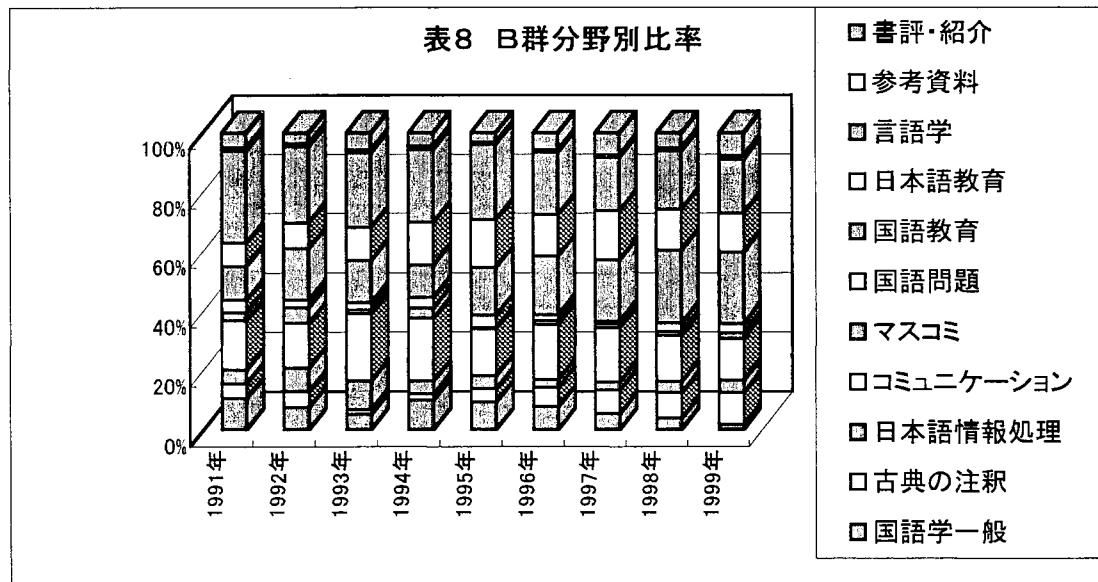
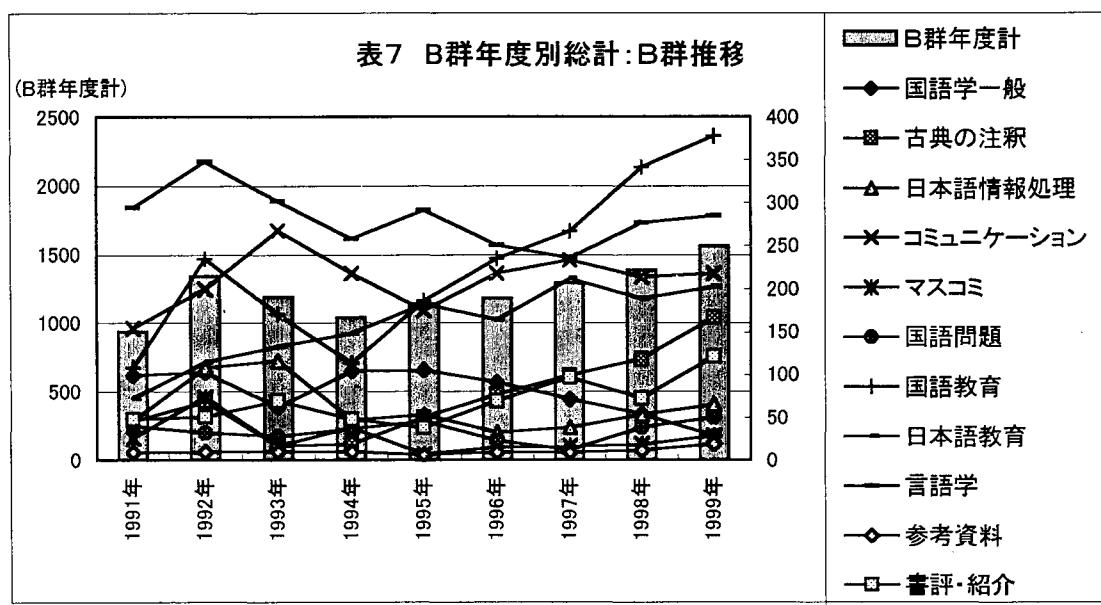
a. 1991～1993年(平均 1157件)→1994～1996年(平均 1119件) 約 3.3%▲

b. 1994～1996年(平均 1119件)→1997～1999年(平均 1411件) 約 26.1%△

c. 1991～1993年(平均 1157件)→1997～1999年(平均 1411件) 約 21.9%△

(2) 周辺的分類では、[国語教育] が大きな伸びを示している。

→【表7 B群年度別総計：B群推移】【表8 B群分野別比率】参照



3. [書評・紹介] にとりあげられた文献の分野の動向

3.1. 資料とするデータと集計方法

(1) 「国語年鑑データベース」にもとづく。[書評・紹介] の対象となっている文献を抽出し、タイトルを手がかりにして、あらためてジャンルを付加した。ジャンルは、該当するものすべてを付加した。

(例) 『日本語接続法史論』 …… [文法] [国語史]

(2) 参考として、その前の 9 年間 (1982-1990 年) の数字も示した。これについては、国立国語研究所のホームページ上で公開されている以下のデータベースにもとづいた。

1982~1985 年分 「国語学研究文献総索引データ 第 1.02 版」

1986~1990 年分 「国語学研究文献総索引追加文献データ No. 1 第 0.9 版」

(3) 1991~1999 年を便宜的に、以下のように 3 年ごと 3 期に分けた。

①1991-1993 年 ②1994-1996 年 ③1997-1999 年

(4) なお、海外の文献は、対象から除外した。

(5) 合計 1336 タイトルが対象となった。

→ 【表 9】参照

表9	82-84	85-87	88-90	①91-93	②94-96	③97-99	項目合計
A 国語史	41	56	25	40	39	79	280
A 音声・音韻	4	8	1	7	8	21	49
A 文字・表記	8	7	3	1	6	22	47
A 語彙・用語	54	60	34	26	23	49	246
A 文法	25	24	13	21	25	29	137
A 待遇表現	4	1	1	3	2	2	13
A 文章・文体	20	16	17	9	17	28	107
A 方言	9	18	16	18	16	17	94
B 国語学一般	28	21	15	17	9	25	115
B 古典の注釈	0	0	0	1	4	4	9
B 日本語情報処理	4	2	1	8	0	10	25
B コミュニケーション	24	26	7	10	16	28	111
B マスコミュニケーション	0	0	0	0	4	2	6
B 国語問題	3	2	0	0	0	4	9
B 国語教育	80	79	21	8	18	89	295
B 日本語教育	7	3	3	4	1	4	22
B 言語学	41	35	11	9	17	21	134
B 参考資料	4	8	3	1	2	8	26
文献数	264	288	149	144	160	331	1336

3.2. 中核的分類

(1) A群では、[文章・文体]が、やや伸びを示している。また、[国語史]が大分

野となっている。→【表10 A群推移表】参照

(2) 文献数を100%として換算すると以下のようになる。

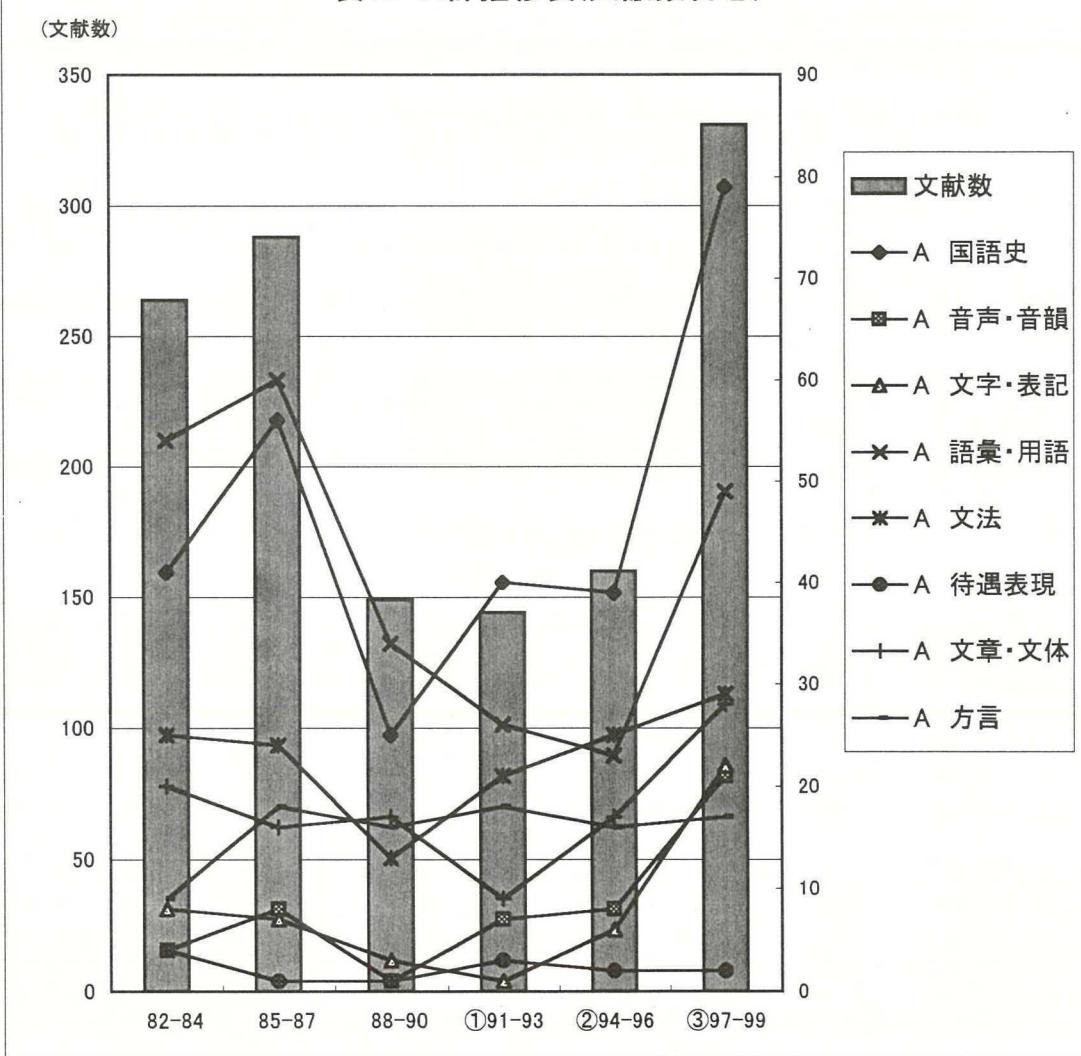
[国語史] ①(約27.8%)→③(約23.9%) 約3.9%▲

[語彙・用語] ①(約18.1%)→③(約14.8%) 約3.3%▲

[文法] ①(約14.6%)→③(約8.8%) 約5.8%▲

[文章・文体] ①(約6.3%)→③(約8.5%) 約2.2%△

表10 A群推移表(文献数含む)



3.3. 周辺的分類

(1) B群では、[国語教育]が大きく伸びている。

→【表11 B群推移表】参照

(2) 文献数を100%として換算すると以下のようになる。

[国語教育] ①(約 5.6%)→③(約 26.9%) 約 21.3%△

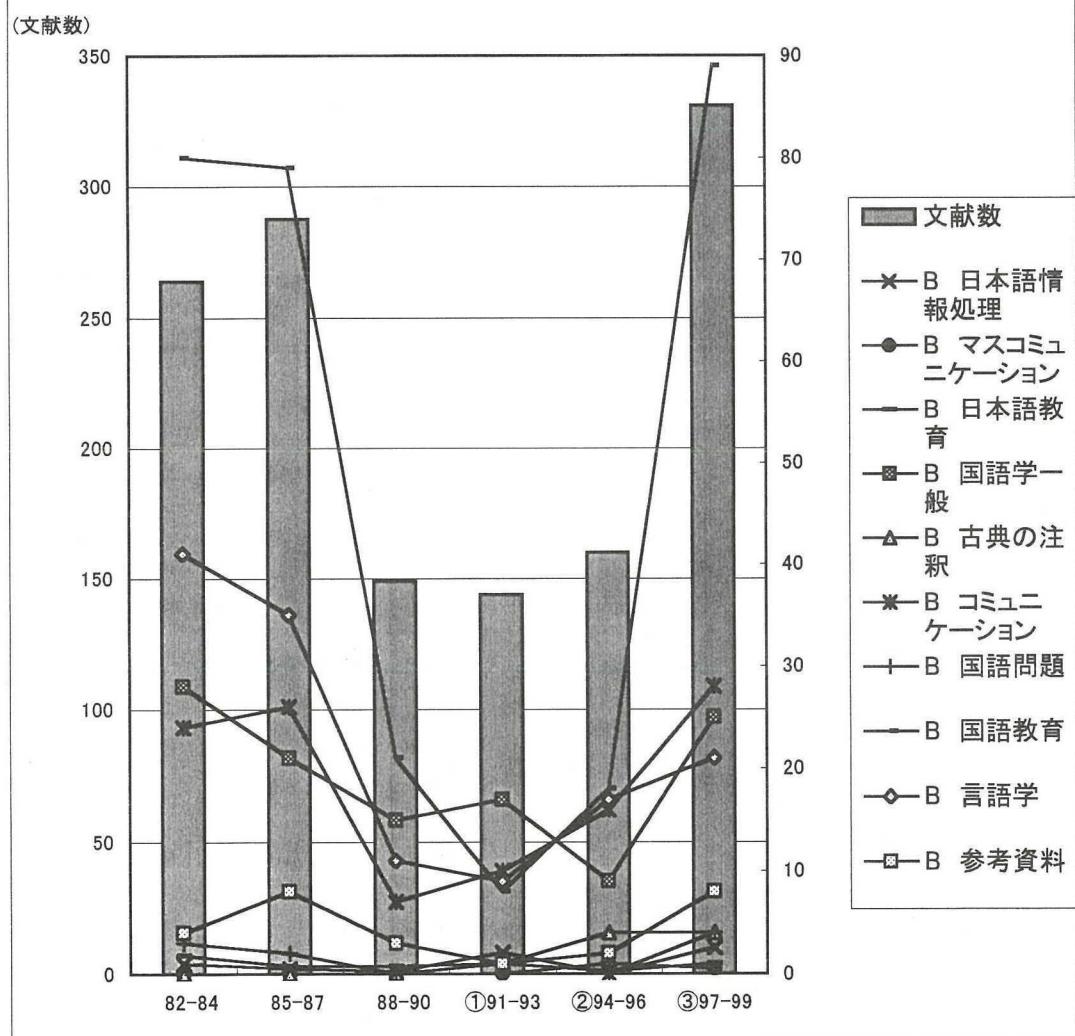
[言語学] ①(約 6.3%)→③(約 6.3%) 約 0%

[国語学一般] ①(約 11.8%)→③(約 7.6%) 約 4.2%▲

[コミュニケーション]

①(約 6.9%)→③(約 8.5%) 約 1.6%△

表11 B群推移表(文献数含む)



4. まとめ

- (1) 以上をまとめると次のようになる。
 - I. 近年、論文数は上昇傾向にある。
 - II. 中核的分類は横這い状態である。
 - III. 周辺的分類はやや大きな上昇を示している。
- (2) 「2. 雑誌論文における 1991～1999 年の国語研究の動向」の結果と、「3. [書評・紹介] にとりあげられた文献の分野の動向」の結果は、以下の 2 つの傾向で一致する。
 - IV. A 群が横這い状態にあること。
 - V. A 群 [文章・文体] が伸びを示していること。
 - VI. B 群 [国語教育] が伸びを示していること。
- (3) 山崎(1990)は、77-80 期と 81-84 期とを比較して、「中核的分類」がわずかに増えていること、「周辺的分類」は 14% 落ち込んでいることを報告している。今回の調査において採録数が伸びているいっぽうで、中核的分類は横這い状態にある。中核的分類は、飽和状態にあると推定できる。
- (4) また、山崎(1990)は、53-56 期と 81-84 期とを比較して、[古典の注釈] [国語教育] が減少していて、「年鑑」が国語学を中心に編集する傾向を強めたと分析している。今回の調査においては [国語教育] が伸びを示しており、『国語年鑑』は国語教育分野も拡充の方向にあるといえよう。

参考文献

- 山崎誠 (1990) 「『日本語研究文献目録・雑誌編』にみる国語研究の動向」
『国立国語研究所研究報告集』11
- 熊谷康雄(1996) 「文献情報のデータベース化と目録作成のシステム化」
『国立国語研究所研究報告集』17